

「あら、おかえりなさい」

仕事を終えたあなたがマンションのロビーに入ると、一人の女性があなたに気づき、微笑みかける。彼女の名前は浅井咲奈。あなたが小学生だったところに、隣の部屋に越してきた人妻だ。

ゆつたりとしたブラウスにエプロン姿。化粧つけもなく、部屋着のまま外に出てきたようだ。

なぜこんな時間に、ロビーにいるのだろう……訝しむあなたの視線に気づいて、彼女ははにかんだ。

「最近、あの人が出張で留守にしているから……新聞、溜めちゃってて。もし泥棒さんに見られたら、留守にしていると思われるんじゃないか……って思うと心配になっちゃって。夜のうちに取りに来たの」

彼女は、不安げに眉を垂らした。

「こんな格好で、恥ずかしいわ。あなたに会うってわかってたら、もっとちゃんとしたのに……」

恥ずかしがる彼女と並んで、エレベータに向かう。

「お仕事、忙しいのね。こんな夜まで働いてて偉いわ。……この間まで、こんなにちっちゃかったのね？」

エレベータに乗った彼女が、自分の胸の高さを手で示した。

ナチュラルブラウンのエプロンでも隠せないほど大きな彼女の胸が、手にぶつかり、ぽよんっ、と、揺れる。

思わずあなたの目は引き付けられるが、彼女は気づかないのか、くすくす笑っている。

「本当に、時間が経つのはや……きやあつ！」

ガタンッ。

急に、エレベーターが揺れた。ちかちか、と赤いライトが点滅する。エレベーターは目的の階の手前で、完全に停止してしまった。

「なっ、なにっ、こわい……」

驚いた彼女が、あなたに抱きつく。ふわふわとした柔らかな体がぴったりとくっついた。彼女の体は、恐怖に震えている。

「やだ、……なにがおきてるの……?」

あなたは冷静に、エレベーターのボタン近くに貼ってあるステッカーを確認し、記載されている電話番号に連絡した。管理会社に状況を説明すると、すぐに復旧する、二十分はかからないだろう、ということをお教えてくれる。彼女もあなたの胸に頬をうずめながら、その会話を聞いている。あなたが電話を切ると、彼女は幾分か落ち着いていた声で言った。

「あ……ありがとう……。私の方が年上なのに、取り乱しちゃって……恥ずかしいわ」

彼女はあなたに体を擦り寄せながら、耳元で囁いた。風呂上りなのか、彼女からは甘い香りがする。

「あなたがいてくれて、よかった……私、最近、……本当に心細くて……。子供だと思ってたのに、いつのまにか、こんなに頼もしい男の人になってたなんて、知らなかったわ……♪」

あなたが体をひねり、彼女の方を見ようとすると、肘が偶然、彼女の豊かな胸に埋まった。

「あん……」

慌てるあなたをよそに、彼女は目を潤ませて、あなたを見つめ返した。

「あ、謝らないで……わざとじゃないのよね？ ……それとも、わざとなの……？」

彼女は力を抜いて、あなたに寄りかかる。瑞々しく弾力のある胸に、あなたの肘がむにつ、と埋まる。

「ん……」

あなたが肘をぐりぐりと動かすと、彼女はそれにこたえるように身体を揺らし始めた。

「……はあっ、ああん……ああ、んっ……ま、まっつてえ……」

彼女は唇をかみしめながら、あなたの肘にそつと触れた。調子に乗りすぎたかと思ったあなたが動きを止めると、彼女は優しく微笑み、あなたの手を自分の胸に導いた。

「私のおっぱいが気になるなら……好きにして、いいのよ……？ 遠慮しないで……、男の子ってみんなおっぱい好きだから……あなたもそうなのよね……？」

無抵抗に突き出された乳房を、あなたは驚ぶかむ。

「ああっ……ん、乱暴ね、そんなにしたかったの……？ もしかして、ずっと我慢してた……？ 私のおっぱい、ずっと見てくれてたの……？ んっ、我慢できて、えらい子ね……。ああ……でも、もう我慢しなくてもいいのよ、そう、……んんっ、はあっ、ああっ、あっ、もつと、もつと触ってえ……」

彼女に頭を撫でられながら、あなたは夢中で彼女の胸をもみしだいた。エプロンの下に手を差し込むと、ブラウス一枚隔てて、素肌のぬくもりを感じる。

「ふふっ、わかっちゃった……？ そう、私、……今日、ノーブラなの……♪ ちょっと家から出るだけだから、って、油断して……すこし触られただけで、気持ちよくなっちゃうよわよわおっぱい、ずっと放っておかれてるさびしんぼおっぱい、たふたふ揺らして歩いてたの……っ♪ あんっ、んっ、違うわ、期

待とか、してたわけじゃなくって……誰かに、おっぱい揉んでほしいとか、好きにしてほしいなんてえっ、いやらしい期待、……期待して、は、あん、んんっ、んっ！　うう、ああ……、そうやって、手のひらでいっぱい、もみもみしてもらったりい……んっ、やさしく、すりすりしてもらったり……、あん、服の上からでも……はあっ、わかるくらいにい、びんびんに固くなっちゃってる乳首、ぎゅうって、おし潰してもらいたい、なんてえ、あっ、ああんっ！　はあっ、あっ、それっ、それ好きっ、びりびりするのおっ……！」

彼女自身が垂れ流している願望の通りに、あなたは彼女の胸を弄ぶ。

「ああん、いいっ……、はあ、どうしよう、きもちいいわ、私、あなたの手で気持ちよくなっちゃってるう……もつと、もつとしてえ……」

彼女は猫が甘えるようにあなたの耳たぶを舐めながら、胸をあなたの手押し付けてくる。

「はあ、んちゅ、あむう……ぺろっ……ちゅ……」

我慢できなくなったあなたは、彼女のエプロンをはぎ取り、ブラウスを左右に割り開いた。

「きやつ、だめ、だめよ、服は着てなきや……だって、誰か、助けに来てくれた人に見られちゃったら……ああんっ♪」

あなたは、身をよじる彼女を壁際に追い詰めると、ぷくつと膨れ上がっている乳首をぎゅうつと摘まんだ。

「あんっ、んんっ、乳首っ、はあっ、きやんっ、そんなっ、あっ、こりこり捏ねちゃだめっ、だめよっ、

ん、んっ！ はあっ、ああっ、かりかり引つかくのも、だめえ……っ♪ はあっ、あんっ、感じちやうから、私、感じちやうからっ♪ 乳首弱いのおっ、ちくびっ♪ あ、かりかりっ、だいすきなっ♪ ああ、あんっ、んんっ、はあ、そうっ、そうよね、ごめんねっ、ごめんなさいっ、んっ、だめなんていってごめんなさいっ♪ あなたの好きにしているのっ、私のおっぱい、好きなだけ可愛がっていいのよっ♪ ああっ、いっぱい、いっぱい触ってちようだいっ、お願い……♪ ああんっ♪」

手を後ろで組み、あなたに胸を差し出す彼女。シミひとつないきめ細やかな白い肌に浮かぶ、人妻とは思えないピンクの乳首。あなたは身をかがめて、彼女の乳首にしゃぶりついた。

「ああ……ふふ、かっこいい大人になったと思ったのに、まだまだおっぱいが好きなんでちゅね……♪ こうしてるとまだ子どもみたい……♪ ああっ、んん……はあっ……ふふ、やさしくちゅぱちゅぱ、気持ちいいわ……はあ……でも、んっ、もつと、激しくても、……うう……ああんっ！ んくうっ、うううっ！ い、いきなり嘔むなんて、ああんっ！ んっ！ いいっ、ああっ、いい、そこぎゅうっつとされるのいいのっ、おっぱいもつといじめてえっ、ひいいっ、あ、やあっ、あっ、はあ、あああっ♪」

彼女の体が大きく痙攣する。彼女は、唾液でべつとりと濡れた胸を隠すことなく、あなたにキスをせがんできた。

「はあっはあっ……気持ちよかったわ……ねえ、キスさせて……？ んふっ、はあ……」
あなたの後頭部に彼女の手が添えられる。

「んちゅう、むっ……はあ、じゆるるっ……」

彼女は柔らかい体を押し付けながら、あなたの口の中を舐め回す。

「ぢゅっ、くちゅっ、……じゅうっ、れろっ……」

歯のつけねを舌先でくすぐり、口内に溜まった唾液をすべて舐めとると、彼女は、あなたの下半身に手を伸ばした。ズボンの下で勃起したちんぽを温めるように、手のひらを擦りつける。

「ふふっ……すり、すり……ここ、こんなに大きくしちやって……♪ お礼させてね……?」

彼女は大きく足を開いたままひざまづく、手早く、あなたのちんぽを取り出した。ぶるんっ。勢いよく反り返りながら下着から吐き出されるちんぽをうっとり眺め、ぴと、と頬を押し付ける。

「もうこんなに固くしてくれてるの……? 嬉しいわ……なんでもしてあげたくなっちゃう……♪ 今、私が気持ちよくしてあげるからね……」

彼女は指でわっかをつくと、亀頭からカリ首までをそっと包み、しゅこしゅここと扱き始めた。

「あぁっ……男の人のちんぽ……♪ ぴくぴく震えて、我慢汁がだらだらこぼれてる立派なおちんぽ……♪ いつの間にかこんなにおっきくなって……♪ なでなでしてあげなきゃ……♪」

最初はゆっくりといたわるように根元から先端まで往復していた動きが、徐々に早くなる。好物を目の前にぶらさげられた獣のような目で、彼女はあなたのちんぽを見つめつづけた。

「しこしこ、しこしこ……♪ はぁっ、さきっぽ、こしよこしよしてあげると、どんどん濡れてくる……♪

♪ あぁっ、すごいわ……お洋服が汚れたら大変よね……♪」

しみだしてきたカウパー液が零れ落ちないように、彼女は左右のおっぱいでちんぽを包み込んだ。I字状の長くて深い谷間からちんぽの先端だけを覗かせて、あなたを上目遣いに見あげる。

「私のおっぱいで、ふきふきしてあげるわね……♪」

彼女はたふたふ揺れるおっぱいを左右交互に動かし、すべすべの肌の感触を押し付けるように動いていく。

「んっ、うんっ……はあっ、あっうい……♪ はあっ、はあっ……ふふ、私のおっぱい、気に入ってくれた……？　ぴくっぴくっ震えてて、今にも出ちやいそう……♪ あっ♪ 動いてくれるの……？　ふふっ、まるであなたに犯されてみたい……んう……はあっ……」

あなたが腰を前後に動かしはじめると、彼女は従順に、両胸を腕できゅつとよせた。柔らかな乳圧をかけられながら、グロテスクなちんぽがぬちゅぬちゅと擦られる音が響く。

「はあっ、さ、さつきは子どもみたいなんて言っでごめんなさい……♪　こんなに固くてりっぱなおちんぽ持つてるなんて、知らなかったの……♪　はあっ、私なんかのおっぱいでよければ、好きにしているのよ……♪　ふうっ、私のおっぱい、あなたのおちんぽ扱くために使っ……♪」

彼女は、身体をくねらせてあなたに媚びる。そんな彼女が、指で乳首を守っていることにあなたは気づいた。彼女の手を払いのけ、狙いをつけて、尖った乳首を亀頭で何度も擦り続けると、彼女は背筋を反ら

して喘いだ。

「はあっ、ああんっ♪ それっ♪ 隠してたのにつ♪ ばれちゃってるのおっ♪ はあっ♪ あっ♪ 私
のっ♪ よわよわ乳首っ♪ はあっ、あんっ♪ おぼえててっ、いじめて、くれるなんてっ♪ うれしっ、
うれしいわっ、いいっ、あひいっ♪ あっ♪ いいっ、もっと、もっとおちんぽちようだいっ♪、ああっ
♪ ああ〜♪」

彼女は嬌声をあげ、身体をのけぞらせる。あなたに奉仕することに夢中になっている彼女は、どんなに
体が揺れても、胸を下から支える姿勢を崩すことはない。健気に足を踏ん張り、あなたを潤んだ目で見つ
めている。

だが、もうすぐエレベーターが復旧する時間かもしれない。あなたがちらりと腕時計を見たのを、彼女は
見逃さなかった。

「はあっ、んっ、……ああっ、……も、もう時間なの……？ やだ、……じゃあ、おくち、おくちにちよ
うだい……♪ あなたのザーメン、全部欲しいの……♪」

彼女は舌なめずりをすると、口を大きくあけて、あなたのちんぽを啜えようとした。

赤い舌を突き出す彼女から逃れるため、あなたは一步後ずさった。

「えっ……？」

眉を垂らす彼女に、仕事帰りで風呂にも入っていない、とあなたは説明した。すると彼女は首を横に振

って、

「洗ってない……？ いいのよ、そんなこと……♪ 私、男の人にこういうことしてあげるの、大好きな
んだから……♪」

彼女は髪を耳にかけると、あなたの太ももに手を添えて、嬉しそうにむしゃぶりついた。

「あむっ……うむ、くちゅっ、ちゅう……っ♪ うふふ、お仕事いっぱい頑張ったひとの匂いがするわあ
……♪ ぴちやつ、ちゅう……っ♪ はあ、私のお口に全部出して、あん、全部飲ませて……♪」

唾液をたっぷり含ませた肉厚の唇で、ぱくり、と亀頭を啜える。そのままむにむにと唇の柔らかさをす
り込んでいく。口の奥に流れてくる先走りの液を、彼女は嬉しそうに飲み込んだ。

「んふう……っ、ふう、おひんぽ、ほいひい……っ♪ ふうっ、ちゅう、ちゅう♪ ふちゅ、じゅるう……
っ♪ おひんぽお……」

躊躇なく竿を根元までくわえ込み、口全体で締め付ける。

「ちゅうっ、じゅるるるるうっ♪ ちゅぱっ、ちゅぱっ♪ ちゅぱっ、ちゅぱっ♪ ちゅうううっ♪」

宣言通りに精液を絞りとりとうとする彼女は、あなたが射精する瞬間も、その後も、暫く口を離さなかつ
た。

「ぢゅっ、んっ♪ ぢゅっ♪ あむっ♪ んちゅ、ちゅ、ちゅううううっ♪ はあっ、ぢゅっ、……ぎゅ、

「ごきゅっ……はあっ、久しぶりの、ザーメン……ちゅうっ……」

喉を鳴らしながら全て飲み干した後、自分の唇をティッシュ代わりに、ちんぽの汚れをふき取っていく。きれいになったことを確かめると、彼女はあなたの着衣をそっと整えた。

「はあっ……気持ち良かったかしら……？ それなら……いいんだけど……」

彼女はふらふらになりながら立ち上がり、ブラウスを掻き合わせて微笑んだ。

「あの……私、……ごめんなさい、我慢できなくて……」

たどたどしく謝罪を口にする彼女。だが、下半身はもじもじと揺れている。

その時、エレベーターが前触れなく動き出し、彼女とあなたが降りるはずだった階に到着した。

「きゅっ……」

急な振動に彼女がバランスを崩す。あなたはすかさず、彼女を抱きしめる。

「あ……エレベーター、直ったのね、じゃあ……家に帰らないと、……？」

離れようとする彼女を力づくで引き留め、あなたはエプロンごしに胸を揉みしだいた。

「ああんっ……そ、そんな……まだ、足りないの……？ ああ……ふうっ……おなかのおく、じんじんし

ちやうう……」

彼女は肩越しに振り返り、濡れた唇で微笑んだ。それは子供の頃から知る女性の、初めて見る顔だった。

「じゃあ……私の家に行きましょう……？ あんっ……♪」

返事の代わりに乳首を摘まみ上げると、彼女は嬉しそうに微笑んだ。